

---

# 共同研究の経過と概要

---

樋口雄彦

## 1. 目的

2011年3月11日の東日本大震災を受け、少なからぬ研究者が反省をこめて学会誌上で指摘したように、戦後日本の歴史学は、わずかな例外を除き、災害史研究に真正面から取り組んだことがなかったといってよい。また、現在、歴史研究者に何ができるのか、何をしなければならないのかについて、現代的課題が鋭くつきつけられた（『歴史学研究』第884号，2011など）。そのような認識を前提としつつ、本研究では、限られた範囲ではあるが軸足を定めて一定の課題に取り組むこととした。震災後も大きな災害が毎年のように起きており、この課題設定は重要度を増しているといえる。

まず本研究の目的の第1は、災害に関する歴史資料について、考古学・民俗学・文献史学の立場から通史的におさえることである。あらゆる歴史研究が資料にもとづくものであるように、災害研究も特定の資料に依拠して実現される。何を資料とするか、何が資料となるのか、またその資料にはどのような特徴があるのかについて、時代や地域、分野を横断して学際的な視点で考える。

目的の第2は、災害に関する記録と記憶との関係について、文献、遺物、伝承などを素材としながら考えることである。

〔文献資料〕 とくに古代以降に起きた災害は、まず公的文書に記録されたあと、多様な素材に様々な目的で遺されていく。その際、素材によって記録される内容が少しずつずれていたり、故意に改竄されたりすることもある。本研究ではそうした媒体によって異なる記録内容を資料の属性と規定し、その歴史的背景をさぐることにある。

〔遺物資料〕 日本の先史時代においては人為的に記録が残される場合は皆無で、古代以降と同じレベルの資料論は難しい。そのため、洪水の痕や噴砂の痕のように、大地に直接刻まれた災害の痕跡以外にも、洪水を引き起こすきっかけとなった多雨多湿現象を、分子レベルで解析し、炭素14年代測定とあわせて、高分解能に環境復元することを目的とする。

〔民俗資料〕 災害の事実は記録や遺物とともに語りや儀礼などの民俗伝承としても共有される。それらについての日本各地の具体的な事例情報の収集と比較分析を行なうことを目的とする。

目的の第3は、災害と復興の関係性を、社会的、経済的な側面からとらえ直すことである。とくに歴史的なその反復の関係性に注目して、被災と復興のメカニズムについての分析を試みる。

以上、3点の目的を設定して災害史研究の基礎をなす資料についての学際的な総合的研究を試みることとした。

---

## 2. 経過

### 平成24年度

#### 〔研究会〕

第1回 日時：2012年5月12日（土） 場所：国立歴史民俗博物館

藤尾慎一郎「震災に向きあう考古学」

上記発表のほか、趣旨説明、自己紹介と抱負、研究内容・スケジュールの検討など

第2回 日時：2012年9月8日（土） 場所：東京ガーデンパレス

宮瀧交二「管見に入った過去2000年間の気候変動研究の成果について」

中塚武「樹木年輪酸素同位体比を用いた本州中部における過去2000年の夏季降水量の年々変動の復元」

小椋純一「調査の中間報告」

上記発表のほか、災害史関連データベースについての情報持ち寄りなど

第3回 日時：2012年12月9日（日） 場所：広島ガーデンパレス、厳島神社

三浦正幸「厳島神社の自然災害の歴史と被災を避けた社殿の構成」

上記発表のほか、厳島神社でのフィールドワーク

第4回 日時：2013年3月3日（日） 場所：葛飾区郷土と天文の博物館

ゲストスピーカー 橋本直子（葛飾区郷土と天文の博物館学芸員）「関東の歴史災害 現地からみた東日本大震災の教訓」

#### 〔個別調査〕

考古分析班：滋賀県立琵琶湖博物館（6月1日）、草津市役所・草津川跡地整備課（7月2日）

藤尾：韓国・高麗大学校博物館／世宗特別市・大平洞遺跡（3月13～15日）

大久保：館蔵資料のうち災害関連錦絵の所在確認を実施

関沢：熊本県大津町にて白川の水害関連の予備的調査（8月2日）

樋口：静岡県立中央図書館（6月9日、7月9日、12月2日）、静岡県文化財団主催「金原明善と災害から郷土を守った先人たち」展（8月4日）、富士市立中央図書館（8月4日）、磐田市歴史文書館（8月27日）、浜松市立博物館（9月29日）、浜松市立中央図書館（10月20日）、富士市立博物館（11月16日）、藤枝市郷土博物館（2月9日）、沼津市明治史料館、沼津市教育委員会市史編さん係などに赴き、明治初年の治水関係文書および文献の調査を実施

1年目の第1回研究会では、津波堆積物の分析や災害後の遺跡分布の関係性への着目など、考古学による災害史へのアプローチの可能性が示された。第2回研究会では、気候変動による平安時代の温暖化を考慮することで「更級日記」の記述や平将門の乱の背景などが説明可能なこと、また、樹木年輪酸素同位体比によって過去の降水量を復元し、近世の飢饉の発生原因などについて説明できることが紹介された。第3回研究会（広島）では、土石流・高潮・暴風雨など歴史上たびたびの被害を受けた厳島神社について、建築図面・文書・写真等をふまえ、被災を回避すべくたくみに構成された社殿の特色を実地で確認することができた。第4回研究会（東京都葛飾区）では、関東・東京低地エリアの歴史災害、具体的には元禄地震・安政江戸地震・関東大震災・宝永富士山噴火・

---

天明浅間山噴火・明治43年水害・東京湾台風・カスリーン台風等についての概要を知るとともに、中世史研究者と歴史地理学研究者における河道への関心の有無や中世以前の史料残存度の地域格差などについて確認できた。

## 平成25年度

### 【研究会】

第1回 日時：2013年6月1日（土）～2日（日） 場所：福島県いわき市

いわき市のボランティア団体「プロジェクト傳」の協力と研究協力者山崎祐子氏（学習院女子大学非常勤講師・民俗学）の説明・案内のもと、津波被害地を巡見し、被災当時のようすや現状や復興計画についての説明を受けた。

第2回 日時：2013年11月3日（日）～4日（月） 場所：沼津市明治史料館他

樋口雄彦「明治初年の治水行政と土木官僚―静岡藩水利路程掛を中心に―」

上記発表のほか、千本松原・浮島ヶ原自然公園・昭和放水路・松岡水神社・雁金堤など、沼津市・富士市の水害・治水関連史跡の巡見

第3回 日時：2013年12月8日（日） 場所：東京ガーデンパレス

中塚武「「高分解能古気候学」と「歴史学・考古学」の接点―気候変動と人間社会の関係性の解明―」

小椋純一「植生景観史研究における学際性について」

上記発表のほか、共同研究のとりまとめ方、『研究報告』の原稿提出スケジュール等についての打ち合わせ

第4回 日時：2014年3月10日（月） 場所：国立歴史民俗博物館

大久保純一「館蔵の鯰絵の紹介・解説」

上記発表のほか、企画展示「歴史にみる震災」内覧会の観覧

### 【個別調査】

樋口：静岡県立中央図書館歴史文化情報センター（4月30日）、焼津市歴史民俗資料館（5月18日）、島田市博物館（7月6日）、豊橋市二川宿本陣資料館（7月13日）、富士市立中央図書館（8月11日、11月10日）、国立公文書館（9月6日）などに赴き、明治初年の治水関係文書および文献の調査を実施し、前年度からの資料・情報の蓄積を継続した。

宮瀧・中塚：総合地球環境学研究所での打ち合わせ（2月26日）

2年目の第1回研究会では、福島県いわき市のうち、豊間・薄磯・沼ノ内・久ノ浜といった地区を巡り、東日本大震災による被災地の現状を実見するとともに、貴重な体験談を聞き、また地域文化の復興にとりくむボランティア団体「プロジェクト傳」の活動状況についても説明を受けた。沼ノ内諏訪神社の境内に設置された、津波で破壊された鳥居・狛犬などをそのまま利用したモニュメントの例など、すでに地域の方々によって進められている記録の保存や記憶の定着化といったものを、現在進行形で確認することができた。第2回研究会では、治水に対する行政の役割に関して、江戸幕府から明治政府への移行過程に位置づけられる明治初年の静岡藩の事例についての研究報告が行われるとともに、静岡県沼津市・富士市に所在する治水関係の史跡・施設などを巡見し、発表

---

---

内容と対応する形で実地における理解を深めた。第3回研究会では、古気候学・植生景観史など自然科学分野から災害史へのアプローチの方法をめぐって、最新の研究成果の報告（過去4,000分の降雨量が復元できたこと）とともにこれまでの研究歴と使用資料の変化や広がり（絵図・地形図・写真から微粒炭・樹幹解析へ）についての報告がなされたほか、今後の研究成果のとりまとめ方とそのスケジュールを議論した。第4回研究会では、歴博が所蔵する鯰絵を実見しながら、安政江戸地震が民衆によってどのようにビジュアル化されたのかについて説明を受けた。

## 平成26年度

### 〔研究会〕

第1回 日時：2014年6月7日（土）～8日（日） 場所：阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター（神戸市）、稲むらの火の館（和歌山県有田郡広川町）

上記の二つの施設を視察するとともに、前者では資料専門員深井美貴氏、後者ではボランティアガイド白岩昌和氏および同館館長からの説明を受け、質問にも答えていただいた。

第2回 日時：2014年9月23日（火） 場所：大東文化会館（東京都板橋区）

若林邦彦「水害にかかわる環境と初期農耕社会集落動態」

宮瀧交二「日本における災害情報継承方法の変遷について」

関沢まゆみ「災害論の一視点—危険と豊饒：伝承事実が語る逆利用の論理」

上記発表を行い、『研究報告』に執筆予定の論文構想について概要説明を受け、メンバー間での質疑応答を行った。

第3回 日時：2014年12月7日（日） 場所：京都テルサ

中塚武「高分解能古気候データを用いた新しい気候災害史研究の課題」

小椋純一「原発情報はどのように伝えられてきたのか—福島第一原子力発電所事故に至る道、またその後—」

上記発表を行い、『研究報告』に執筆予定の論文構想について概要説明を受け、メンバー間での質疑応答を行った。

第4回 日時：2015年3月15日（日） 場所：国立歴史民俗博物館

藤尾慎一郎「登呂遺跡の洪水」

大久保純一「幕末出版ジャーナリズムと災害表象」

上記発表を行い、『研究報告』に執筆予定の論文構想について概要説明を受け、メンバー間での質疑応答を行った。

### 〔個別調査〕

樋口：静岡県立中央図書館歴史文化情報センター（4月16日）、掛川市立大須賀図書館（10月11日）などに赴き、明治初年の治水関係文書および文献の調査を実施し、前年度からの資料・情報の蓄積を継続した。また、治水技術関連として幕末明治期に刊行された土木測量関係書籍といった実物資料を収集した。

関沢：和歌山県吉野町（1月22日～24日）に調査・出張し、『奈良県風俗志資料』に記載されている河原にあったとされる国栖村南大野の墓地の現状確認とその移転の経緯について聞き取り調

---

査を行った。

大久保：目で見える近世・近代の災害記録として浅間山噴火・安政大地震・磐梯山噴火や各地の火災・水害関係の摺物・冊子類を収集した。

3年目、全4回開催した研究会のうち、1回は神戸市・和歌山県有田郡広川町においてフィールドワークを実施し、災害史の資料や遺跡をめぐる保存・公開、地域での災害の記憶の継承のされ方に関して知見を広げることができた。他の3回の研究会では、メンバー7名が『研究報告』に執筆する予定の論考について構想を発表した。そこでの主な成果は以下の点である。

第1は、地球研の中塚氏が推進し、蓄積している酸素同位体比分析による前1300年以降現代までの1年ごとの温湿度のデータと考古学及び歴史学の報告事例との照合を行ったことである。それにより、若林氏の発表から、淀川流域の弥生集落では大きな水害被害をたびたび受けていたにも関わらず、集落移転がなされず、人々が戻ってくることを繰り返していたが、古墳前期から中期（紀元後4世紀～5世紀）になると段丘上面に集落がつくられるようになったことについて、気候変動のデータを合わせると、気候変動があまりない時期に段丘上面への移転が行なわれたことが指摘され、その理由を環境決定論と社会統合の進展という社会決定論との両面から検討することが重要であることがメンバー間での共通理解となった。

また、藤尾氏による「登呂遺跡と洪水」の発表では、弥生後期に出現した登呂遺跡は約300年にわたって何度も洪水にあいながら水田稲作を続けてきたことが知られていた。I期からIV期（紀元後1世紀～4世紀）のうち、II期（後2世紀前葉）に起きたとされる洪水が、出土した矢板の年輪年代と、酸素同位体比分析の結果をつきあわせた結果、雨量が最も多いことが知られていた127年と結びつく可能性が指摘された。今後、登呂遺跡から出土した木製品を対象に酸素同位体比分析を行って、後1～4世紀という時期幅で温湿度の変化を検証する必要性が出てきた。なおこの研究は平成27年4月に次のステップへ向けて動き始めている。

第2に、民俗学では、関沢氏の発表により、野田三郎という和歌山県の民俗学研究者がかつて「流葬をとまなう両墓制」として1970年代に学会誌等で発表していた日高川や紀ノ川の岸辺や中洲に埋葬墓を設ける事例群に再着目することによって、大水によって流失することをあらかじめ予想したうえで営まれているその種の墓地について、生活上の必然である汚穢の蓄積を洪水と氾濫という自然災害が掃除し浄化して新たにリセットするという逆利用の発想の存在が指摘され、防災ではなく「対災」という語で呼ぶべき営みが注目された。この「対災」という用語の検討から、洪水の事例では弥生集落のリセットや、熊野大社の例にみるような大河原の中の斎地など、時代ごとにその概念によって解釈できる事例が存在することが指摘された。また、歴史学では、樋口の発表により、近世においては洪水や高潮被害などの罹災にあっても、村民の自由意思による移転が認められていなかったため為政者の意図による移転や、村民による故郷意識によって一度移転した後、数年後に元の場所に戻ってくる事例（駿河国富士郡松岡村）もみられることが指摘された。

第3に、資料論という観点からの成果としては、従来の美術史研究からは省みられなかった一枚摺りをはじめとする幕末以降に出版されたさまざまな災害図について、災害の事実とその表象という視点から見直す試みが始められていることがあげられる。

---

### 3. 成果

2011年3月11日の東日本大震災を契機に、歴史学・考古学・民俗学など各学界では専門誌において災害関連の特集を組むなど真摯な取り組みが続けられているほか、研究書や概説書・事典などでも関連する出版が相次いでおり、災害史研究は大きな進展を見せたといえよう。そのような状況の下、本館の基幹研究「震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究」の1ブランチである本研究は、通史的、学際的研究を特色とするものであった。主な成果は以下の5点にまとめられる。

#### (1) 高分解能古気候データと水害の記録の照合

共同研究員各位の多様な専門分野の研究に学際性をもたせたのは、地球研が行なっている高分解能古気候データの活用であった。一般には、気候変動が大きい時期に社会不安が増大し、政治的変動も起こるとされているが、大阪平野の弥生集落の発掘事例では、気候が安定している時期に段丘上面への集落移転が行なわれていた。気候変動の研究成果の活用は魅力的ではあるが、いわゆる環境決定論と社会決定論との両方の視点のもとでのさらなる検討が必要であることが共通認識となった。また、災害研究は自然科学と人文系をあわせた研究課題として大きな可能性があることもあらためて認識された。

#### (2) 水害と集落移転の通史的研究

洪水で流されてもまた元の場所に集落や神社や墓地を作る事例が、考古学、歴史学、民俗学の各分野から紹介され、人々の水害への対応と意識を通史的に考察するためには有効なテーマであることが明らかになった。水害にあっても再び元の土地に集落などをつくる事例が、古代の弥生集落においても、また近代の明治以降の三陸津波、さらに2011年の東日本大震災後の東北地方の海岸部の集落においても共通している点などが通史的視点から注目された。弥生集落の事例においてはその理由の一つとして肥沃な土地が求められたと考えられるが、三陸津波の場合も漁業に便利な浜が有利という経済的理由が存在していることが観察されている。また、近世においては駿河国、遠江国の事例により、罹災によって居住地が移転した場合でも、貢租負担者である村民の自由な移動はできなかったという例が確認されたが、その場合は村請制という政治的理由によるという仮説も可能であろう。このほか、埋葬墓地の河原への設営の報告、中世の芦田川流域に展開した草戸千軒町や、熊野川の中洲に位置していた熊野大社の事例など、氾濫で流されてもまた同地に作られるさまざまな事例から、経済的理由、政治的理由のほかに、汚穢を流すなど観念的理由など多様な理由をその背景として想定する必要があることが明らかになった。

#### (3) 災害の表象という視点からの資料の評価

災害の記録には、遺物資料、文献資料、金石文資料（記念碑の建立）等々があるが、幕末において注目されるものに「災害図」とでも総称すべき刷物や冊子本の出版がある。前述したように美術史的には評価がされにくかったものであるが、安政大地震などを描いた刷物をあらためて災害の表象という視点から読み解く試みがなされた。その内容は、火事が起こったところを詳細に記録し、

安否を知らせる目的を有する速報性を重視するものから、震災でもうけた職業を鯨絵にコラージュした戯画風のものまで多様である。またその形状も一枚摺りが先で、後に冊子で出されており、それらは大災害を記憶するためという意味でも明治以降の震災絵葉書やグラフ誌の災害特集号の類につながっていく可能性が指摘された。

#### (4) 近世・近代移行期の防災行政に関する資料集成とその検討

江戸幕府の後身である明治初年の静岡藩が治水行政を担当すべく設置した水利路程掛という役職について、幕府時代の普請役や明治政府の担当官庁（大蔵省土木寮・内務省土木局など）との人的系譜や機能の変遷、技術レベルの差異などについて検討を行い、行政分野での担い手の変化から防災・復興における近代化の特徴を探ろうとした。あわせて静岡藩領内の村々が水利路程掛に提出した工事関係書類（目論見帳・出来形帳など）をできる限り収集し、わずか3年ほどの対象期間であっても作成された資料の膨大さとその背景にある治水への不断の要求を確認することができた。

#### (5) 現地研究会の成果

第1年目に広島県宮島の厳島神社を見学し、三浦氏の案内により、神社本殿の立地がいかに大潮や大風、台風の影響を計算したうえでのものであるかについての現地確認を行なった。第2年目には東日本大震災の被災地である福島県いわき市を訪れ、「プロジェクト傳」を主催している山崎祐子氏による津波被害の現状の案内と、体験者の体験談を聞くことができた。第3年目には前述のように神戸市の阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターおよび1854年の安政南海地震津波から村人を守った浜口梧陵を記念する稲むらの火の館を見学した。文化財レスキューや展示、史跡保存、モニュメント建設なども現代における災害の資料化の営みであり、その中核的かつ継続的な担い手である文化財担当部署・博物館・防災センターなどの施設やその職員（学芸員ら）は災害史資料の収集・保存・活用の拠点・キーマンであることなどが再認識された。また、この研究期間の2015年1月17日は阪神淡路大震災から20年目に当たり、その記念追悼行事が行なわれたが、災害は、過去のものではなく現代社会の問題であり、被災と復興、記憶の継承と記念への努力、そして防災対策など、多面的に考察を進める必要があることへの認識を深めることができた。

各人の具体的な成果については、当館の『研究報告』特集号に盛り込み、2016年度に刊行することとした。論考タイトルは下記の通り。ただし、実際には投稿が間に合わなかったメンバーもあり、その分については本誌に掲載できていない。

中塚 武 「高分解能古気候データから始まる新しい災害史研究の方向性」

藤尾慎一郎 「登呂遺跡の洪水」

若林邦彦 「水害にかかわる環境と初期農耕社会集落動態」

宮瀧交二・中塚 武 「古気候学からみた“平将門の乱”の再検討」

三浦正幸 「社寺・城郭の古資料による自然災害の詳細検討の可能性」

大久保純一 「幕末・明治の出版にみる災害表象—風景表現を中心に—」

樋口雄彦 「近世・近代移行期の治水行政と土木官僚—静岡藩水利路程掛とその周辺—」

関沢まゆみ 「民俗学の災害論・試論—危険と豊饒：伝承事実が語る逆利用の論理—」

- 
- 小椋純一 「原発情報はどのように伝えられてきたのか—福島第一原子力発電所事故に至る道、  
またその後—」  
宮瀧交二 「日本における災害の記録化と災害情報継承方法の変遷について」

**4. 研究組織** (◎は研究代表者, ○は研究副代表者)

中 塚 武	総合地球環境学研究所	若 林 邦 彦	同志社大学歴史資料館
宮 瀧 交 二	大東文化大学文学部	小 椋 純 一	京都精華大学人文学部
三 浦 正 幸	広島大学大学院文学研究科	藤尾慎一郎	本館・研究部・教授
大久保純一	本館・研究部・教授	○関沢まゆみ	本館・研究部・教授
◎樋口雄彦	本館・研究部・教授		

(国立歴史民俗博物館研究部)